



ボンバナ (ヤナギラン)

一般社団法人 全国樺太連盟

●設立年月日

昭和24年9月15日 厚生大臣許可

平成26年3月24日 内閣総理大臣認可

●設立の趣旨・事業等

全国樺太連盟は、当初、樺太引揚者の援護更正と相互扶助を目的として、樺太関係の有志が中心となり、昭和23年4月に結成され、翌年厚生省から社団法人の許可を受けました。

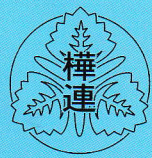
以来、半世紀にわたる時代の変遷とともに幾多の曲折を経ながら、樺太関係者の中心団体として発展し、現在は、故郷を失った者同士の連帯の上に立って、激しく変化する内外諸情勢に対応しながら、会員の福祉の増進、関係団体との連絡協調を図るほか、次の事業活動を行っています。

- 1 樺太の文化、歴史の伝承とPR活動
- 2 樺太関係資料の展示
- 3 樺太研究者等に対する援助・助成
- 4 樺太記念碑・慰霊碑等の調査と保存
- 5 「樺連情報」の発行
- 6 樺太(サハリン)との国際相互理解促進
- 7 その他目的達成のために必要な事業



樺連

のしおり



一般社団法人
全国樺太連盟

樺太略史

中国、朝鮮の古書（山海経、海東諸国記）には、いずれも「日本の北（又は領域）は黒龍江口に起る。」とある。

1644年（正保元年）

徳川幕府が松前藩から提出の所領地図を基に作成した「正保御国絵図」に、カラフトは北海道の北に大きい島として描かれている。

1679年（延宝 7年）

松前藩の穴陣屋が久春古丹（大泊）に設けられ、以来、日本の漁場として開拓が続く。

1806年（文化 3年）

ロシア海軍士官ら久春古丹を焼討ち、翌年エトロフ島とともに留多加を急襲。

1808年（文化 5年）

幕府は、最上徳内、松田伝十郎、間宮林蔵らを相次いで派遣。最西端ラッカが日本の国境の地で、樺太が離島であると見極める。

1809年（文化 6年）

間宮林蔵、海を越えて大陸に至る。間宮海峡を発見、樺太が島であることを確認。

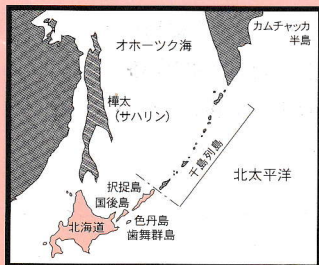
1853年（嘉永 6年）

ロシアは、北樺太北端クエグト岬に露国旗を掲げ、領有を宣言。次いで久春古丹に陣営を設け、日本に圧力をかける。

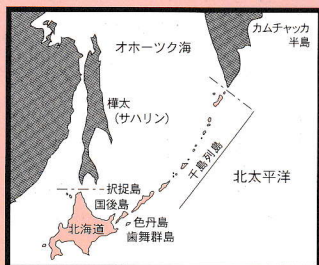
同年、ロシア使節プチャーチンが長崎に来て、樺太、千島の国境画定と交易を求め、日本全権筒井肥前守、川路聖謨と交渉したが、まとまらず。

1855年（安政 2年）

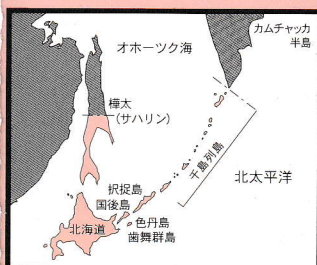
再びプチャーチン来航。下田において日本全権（筒井、川路）と交渉、日露通好条約が結ばれた。国境については、「カラフト島は日本国と魯西亜国の間において、界を分たず是迄仕来（しきたり）の通たるべし。」とされた。



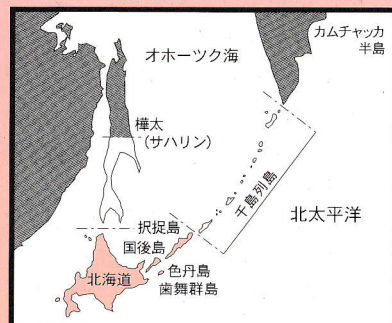
1) 1855年の日露通好条約に基づく国境線



2) 1875年の樺太・千島交換条約に基づく国境線



3) 1905年のポーツマス条約に基づく国境線



4) 1951年サンフランシスコ平和条約に基づく国境線（現在）

1859年（安政 6年）

ロシア東部総督ムラヴィヨフは、軍艦7隻を率いて品川に来航。樺太全土はロシア領と威嚇したが、幕府はこれを拒否。

1865年（慶応元年）

岡本監輔は、樺太最北端ガオト岬に至り、「大日本領」と記した標柱を建てる。

1867年（慶応 3年）

ロシアは強大な軍備を背景にペテルブルグの国境会談で幕府に迫り、「樺太島仮規則」を調印。この規則により初めて樺太は日露両国民雑居の地となる。

1875年（明治 8年）

樺太・千島交換条約締結により、300年に亙る先人の努力は水泡に帰し、以後樺太全島はロシアの流刑地となる。

1905年（明治38年）

日露戦争後の講和条約により、北緯50度以南の樺太が日本領として復帰。以来40年間、われわれの父祖はここを墳墓の地と定め、酷寒不毛の地を開拓、心血を注いで近代樺太を築きあげた。

1941年（昭和16年）

太平洋戦争起こる。

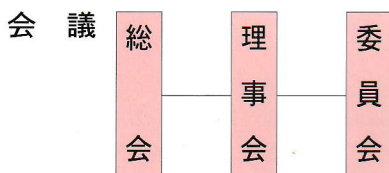
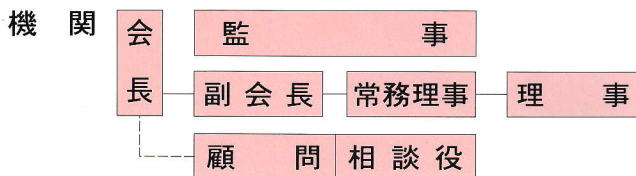
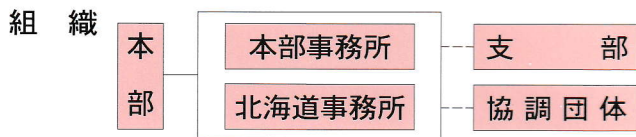
1945年（昭和20年）

8月9日、ソ連軍は突如日ソ中立条約を一方的に破棄、南樺太に侵入、占拠。8月22日停戦。

1951年（昭和26年）

日本は、サンフランシスコ条約（ソ連は不参加）により、樺太・千島18島を放棄したが、国際法上これらの地域の帰属は未定であり、帰属決定の国際会議も開かれていない。

組織・機関・会議等



委員会

理事会の付託又は会長の諮問による事項を審議し、処理するために委員会が置かれる。

委員会の他に、公益事業の計画、推進、報告、評価のための会議が開催される。

樺太関係資料館へのご案内

平成16年8月2日樺太関係資料館（樺太記念館）が開設されました。樺太関係者の想いに応え、来館者に広く樺太が理解されるように、充実した展示に努めます。

場所 北海道庁旧本庁舎「赤れんが庁舎」内
〒060-8588 札幌市中央区北3条西6丁目

開館時間 8:45～18:00

休館日 年末年始

樺太の地誌

位置

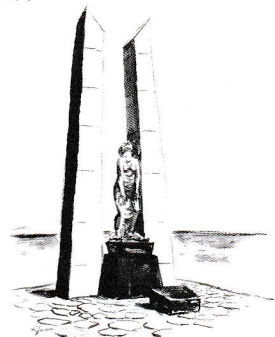
- 北緯50度が日ソ両国の国境。
その南端西能登呂岬と北海道宗谷岬とは43kmの距離である。

面積

- 約36,000km²で、北海道の約43%。
関東1都6県と山梨県を合わせた位の広さである。

人口

- 40万6千余人
—昭和16年の国勢調査—



「永雪の門」稚内市

樺太の名称

- カラフトの語源には諸説あるが、アイヌの伝説に基づく西鶴定嘉説が有力である。

太古、国造りの神が大きい島を造り、後でそれを北海道と樺太に分けた。それをアイヌ語では、カムイ（神）、カラ（造る）、プト（河口）、アツイ（海）、ヤ・モシリ（丘・島）という伝説である。

そのカラフトを島名として用いたのは日本人のようで、唐太島の字を当てた。カラフトが、その後カラトまたはカラフトに転化した。

- 徳川幕府は当初北海道・樺太を総称して蝦夷地と言ったが、1809年（文化6年）からは樺太を北蝦夷と公称した。

その後北方の経営が進み、1869年（明治2年）開拓使がおかれて、現在のように北海道・樺太（カラフトと読む）という公の名が制定された。いずれも松浦武四郎の意見による。

- サハリンは、北方民族ツングース語で、サハリン・ウラ・アンガ・ハタ（“黒龍江口の山”という意）から呼称されるようになった。ロシア語ではない。